

トルストイの芸術

「蝶の雑記帳 91」

孫の通う公立中学校では毎日十分ほど読書の時間をもうけている。そしてありがたいことに、一年生の中ごろから、その時間に読む本を贈るというやり方でわたしが書物を選定できるようになった。

孫は小学生のころから『ハリー・ポッター』シリーズに熱中していたので、その冒険ものに連続するだろうと考えて、最初に岩波文庫の『モンテ・クリスト伯』の一冊目を贈った。しばらく経つと読み終わったと連絡があった。おや、と思いながら続けて送っていたら、とうとう全七冊を読み通した。その読書力を喜んだけれども、作品の選定はまずかったと反省。外国人との交際の機会が増えるだろうこれからの若者は話題に事欠かないように備えなければいけないと考えるので、世界で名の知られた作家の作品を推薦したのだが、中学生にふさわしい作品を選ぶ必要がある。

そこで次には、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』、夏目漱石の『ぼっちゃん』を選んだ。そのあと、国が異なるようにしようとトルストイの作品を考えた。『戦争と平和』を選びたいところだが、長編すぎるし内容も中学生には早すぎるだろう。そこで、ロシアの民話を題材にした『イワンのぼか 他八篇』（岩波文庫）を選んだ。

こう書いたけれども、中学生はもっとちがう本も読みたいのである。先日は、「真田十勇士」を注文してきた。それなら、昔の講談ものがよいかもしれないと考えてそういう本を探したが、適当なのが見つからなかった。やっと松尾清貴という人の文庫本を選んで送った。絵を描くことの好きな孫は、冬休みの宿題の一つとしてその本の劇画風の表紙を模写したが、あまり熱心に時間をかけてやるものだから、母親に怒られるしまつ。

病気が見つかり娘の住んでいる町で手術を受けようと思って受診に行ったおりに、『イワンのばか 他八篇』をもち帰った。じつは、孫に推薦しておきながら、わたしはまだその本を読んでいなかった。子供向けの本か何かで見かけ、そういう民話という先入観が手にとらせなかったのである。今回、その怠りは作家トルストイのことをわたしがよく知らなかったせいだと知った。岩波文庫の表紙には、「民話の素朴な美しさの中に厳しい試練に耐えぬいたトルストイの思想の深みがのぞいている。ロマン・ロランが“芸術以上の芸術、永遠なるもの”と絶讃し、作者自身全著作中もっとも重きを置いた作品」と書かれている。この本を売るための宣伝文だとしても、ロマン・ロランと著者自身の言葉は重い。

実際、作品を読んでみて十分な手ごたえを感じた。いくらか感想を書いてみよう。若いころ読んだ『戦争と平和』の記

憶はうすれたが、トルストイという作家の構想力や豊饒さに感心したと思う。ところが、この民話集は短い題材に基づいているからでもあるが、豊かな記述であふれることはなく、むしろ厳選された言葉で必要なだけ物語が語られていると思う。構成はよく整理されているのだろう。トルストイはやはり語りが巧みだ。けれども、聞き手の歓心を引くような話法を採用しているのではない。『イワンのばか』の話はいくらか聞いたような気がするから、この九篇でわたしが最も魅力を感じたのは『洗礼の子』である。この作品は、小説というジャンルが生み出す人間の空想力をかきたてる力をもっている。それでいて、選ばれた九篇の民話のどれもがもつ精神性がこの作品にもある。

先ほど引いた岩波文庫の表紙の文の前には、「愛すべきロシアの大地のにおいがする」という言葉が置かれて、話が生まれた土地のことを言っている。日本の芥川龍之介の『蜘蛛の糸』や太宰治の『走れメロス』を思い浮かべても、物語の舞台となる土地が話のイメージや味を異なるものにすることが判る。しかし、民話は民衆のあいだで長い年月をかけてもまれて、物語の筋が落ち着くところにたどり着いている。その点で、トルストイの民話は芥川や太宰の作品と異なるだろう。『蜘蛛の糸』や『走れメロス』には元の作り手の作意が見え、芥川や太宰はそのプロットを自己のものに改めたのだと思われる。それに、“転回”があったというトルストイの民話集には、まだ若かった芥川や太宰の達していない精神

性が加わっていると思う。しかも、その文章は大作家トルストイが心を尽くして書いたものなのだ。訳者中村白葉が解説に言う「本質的に人生を見る目、人間を把握する力」をその文章に感じないわけにはいかない。

と書いてきたが、作品の内容に踏みこんでこれ以上言えばぼろが出るだろう。作品の受けとめはわたしの内部にとどめて、トルストイという人のことをもう少し考えてみたい。

解説によれば、1828年生まれのトルストイは1870年代に転回を果たしたらしい。わたしはそういうことも知らなかった。白状すれば、『戦争と平和』よりも小説として優れているといわれる『アンナ・カレーニナ』もまだ読んでいない。今回読んだ九篇を含むロシア民話集など転回後の作品は、「おおむね、後年『芸術とは何か』としてまとめられたその見解に従って述作されたもの」で、後期作品の特徴は「その宗教性、道徳性、社会教化性に富む」点にあるのだという。だが、回心によって晩年に宗教家・道徳家と見なされるようになったトルストイについて、「真の作家の目は、いわゆる宗教家・道徳家とはどこか違っている」とも言っている。この言葉は、わたしが『洗礼の子』から受けた「小説」という受けとめを裏づけてくれる。

訳者中村白葉は、著作『芸術とは何か』をふまえてこの民話集に対する簡単な評言を記しているが、「その芸術観をも

つとも具現している作品が民話集」なのだという。そして、「その内容—宗教的普遍性である主題によって光るとともに、明瞭、単純、簡潔の三条件を具現している形式においても、民衆芸術の完璧」と評価する。ロマン・ロランの評言「これは近代芸術における唯一無二の作品である」と「芸術のあらゆる死すべき要素から浄化されて、永遠なるもの以外のなものをも持たない」も引用されている。『ジャン・クリストフ』の作者ロマン・ロランは、人を鼓舞する文章を書いた人だから、これほどの言葉で称えるのを驚いてはいけないうらう。

解説が挙げるこれらの称賛と、もう一つの「これらの物語は、トルストイがその芸術論において要求した真の芸術である諸条件をほとんど完全に具備している」という言葉は、それをわたしなりに判断するために、トルストイの芸術論を知ることを要求した。

そこで、岩波文庫『芸術とはなにか』をとりよせた（1958年改版の本。1896年生まれの訳者河野与一の日本語は平易でしかも意を尽くしたものだ。Wikipediaで調べたら、哲学の徒。1950年教授職を辞して岩波書店の顧問になったという。世の中にはこんな生き方をする師と仰ぐべき人がいる。こんど孫に読んでもらおうと思っている『プルターク英雄伝』もこの人の訳書にしよう）。

予想に反して『イワンのばか 他八篇』よりも厚い。片手間の著作ではないのだ。わかりやすい論じ方で書かれているが、

主題にふさわしく論の建て方は本格的である。第三節で、十八世紀の美学の創始者とされる人から始めて、この著作が書かれた十九世紀終わりまで、美と芸術についての議論の要点を短い語句だがいちいち挙げてまとめている。そこには、さまざまな美学者に加えて、優れた哲学者や実践者である高名な文学者なども含まれる。仕事にあたって事前の調査や考察を行なうのが、トルストイの流儀だということを知った。『戦争と平和』の戦場を描くあの長い記述には、研究とも呼べる時間をかけた調査があっただろう、と今になって判る。それが、大きな戦争の全景を把握して、さらに戦闘の進行に応じた各場面の臨場感あふれる描写を可能にしたのだ。

美学についての第三節の概論は、しかしながら、芸術をどう定義するか美とはどういうものかに定論がないこと、各人がそれぞれの主張をしていることを明らかにするために置かれている。第二節がすでに、トルストイの見方の要点を、「実を言うと古代の人には、今の美学の基礎とも目的ともなっている、善とは別な、美の意味がありはしなかった」、と書いている。ロシア語には、近代になって西欧で使われだした「美しい行為」や「美しい音楽」などという「美」の用法はなかった、と。

トルストイは、まず、芸術を「快感の手段と見ないことにして、人間生活の一つの条件」とし、「芸術のはたらきは、人間に聴覚や視覚で他の人間の心持の現われを知るとその

心持を表わした人が感じたのと同じ心持を感じる力があるというところから来る」と考える。そして、「芸術とは、一人の人が意識的に何か外に見えるしるしを使って自分の味わった心持を他の人に伝えて、ほかの人がその心持に感染してそれを感じるようになるという人間のはたらきだ」と要約する。このやさしい言葉での定義はわかりやすくとてもよいと思う。訳語の手柄だろうか、夏目漱石が文学に対して用いた「情緒」という言葉よりも「心持」の方が、広がりもあって安定していると思う。

ところがトルストイは、この芸術に、「個人や人類の生活にとっても善に向かう運動にとってもなくてはならない必要な交通の手段、人間を同じ心持の中にむすびつけるための手段」という意味づけを与える。ここで、芸術は「善」に接続される。さらに、「芸術の価値つまり芸術の与える心持の価値を決めるのは、人生の意味を人間がどう見るか、言い換えると、人間が人生の善はどこにあって悪はどこにあると見るかということに関係している」と、善による芸術の価値づけが行なわれる。ところが、「人生の善と悪は宗教と言われるものがきめる」という判断がつけ加わる。ここでトルストイは、「いつでも、どんな時代どんな人間社会にも（キリスト教徒ではないどの民族にも）、何が悪い何が悪いということについて、その社会のすべての人間に共通な宗教心がある」と言って、宗教という言葉を広い意味で使っている。しかし、芸術の与える心持の価値が善できまり、その善をきめるのが

「宗教」ということになると、「宗教」がきめる善が芸術に対して高い意味をもつ考え方に誘導してしまう。

この第六節には教会キリスト教に対する率直な批判がある。「法王をはじめ宗教の職についている人々まで、実は何も信じていなかった」とまで言明して、たいへん厳しいものだ。この批判を、現代の日本や世界の僧はどんなふうにとめらるだろうか。それは措くとして、このような発言をすれば、教会や政府から著作の発禁処分を受けることは免れない。

他方でトルストイは、「本物のキリストの教え」や「神」という理念を離れることはなかったようだ。それは、トルストイに、芸術の価値となる善をいっそう厳格なものとするようにしむけた、と考えることができる。

これよりあとの節でトルストイは、この観点から世にある芸術を吟味・批判し、自分の考えをのべる。新しい思いつきや新しい心持を与えることが重視されるようになって、内容が貧弱になってきたと見る。形式の美をなくして気取ったわけのわからないものになったし、率直なところをなくしていかにも工夫を凝らした理詰めのものとなった、とも言う。これはある種の近代批判である。

ボードレーがまな板に上げられ、「判じ絵のように充て推量をするほかはなくて、大部分は解けないままになっている」と率直な感想をのべる。近代の詩人たちは詩論を書いて

自分たちの詩を理屈づけたから、ヴェルレーヌの『詩学』も批判の対象となった。マラルメの「詩にはいつでも謎がなくてはならない。それが文学の目的なのだ。他に目的はない。仄めかしだけで物を書かなければならない」という主張を批判せずにおくことはできない。芸術観は真っ向から対立している。トルストイは、「この現象の説明は一つしかない。つまり、こういう詩人が仕事をしている社会の芸術は、人生の本気で大切な仕事ではなくて、遊びに過ぎない」と断ずる。

ここでわたしは、上に名の挙げた詩人たちの伝統を受け継ぐフランスで、二十世紀後期、先輩たちの詩のように意味のあいまいな言葉で議論する超モダンな思想が勢力を得たことを思い出した。見かねたアラン・ソーカルという物理学者が、彼らの文体をまねて科学用語や数式をちりばめた内容のない論文をその系統の学術誌に投稿したら、そのまま掲載されるという事件が起きた。ソーカルはそれを暴露して、ポストモダン思想家たちの議論の仕方では意味を結びがたいことを示し、『「知」の欺瞞』という書物を著わした。この事件を参考にすれば、トルストイの言い分に耳を傾けるべきことが判る。

議論は芸術の分野全般に及び、それぞれの分野で具体的に作者を挙げて問題点を指摘する。トルストイには、「借り物、模写、飾り、効果の覗い、釣っていく工夫」などの難点が見えるのである。厳格な芸術批判は自分の作品にまで及ぶ。自

身の前期の作品も転回後の厳しい視点からは難点を含むと見たのだ。そうして、後期のベートーヴェンも批判をまぬがれない。これにはわたしもたじろいでしまう。

でも、あれほどトルストイの民話集を絶賛するロマン・ロランは、『ベートーヴェンの生涯』を書いてわたしたちを励ましたではないか。そうすると、心性の似たトルストイとロマン・ロランがベートーヴェンの音楽から受けとった心持は必ずしも同じではない、ということである。先ほど引用したトルストイの芸術の定義はとてもよいと思うけれども、その許容する範囲は定義者自身が多くの作品に対して適用した規格よりもゆるやかだと考えるべきではないか。

この著作でトルストイが開陳している言葉にはまだまだ聴くべきところがあるけれども、この感想文に書きとめるのはあきらめて、芸術は心持を伝えるという点について、また我田引水の議論を加えてみよう。

その時代にあった美学について概括したところに、カントの美学についても書いている。さまざまな説があるという議論のなかに埋まっているが、一応敬意をもって評価していると見える。トルストイはそれを次のようにまとめている。

——カントの美学は次の思想を元にしていて、カントによると、自己の外で自然を認識し、自己の中で自己を認識する。自己の外の自然の中では真を求め、自己の中では善を求める。

一つは純粋理性の仕事だし、もう一つは実践理性(意志)の仕事だ。この二つの「認識」の手段のほかに、カントによると、判断力というものもあって、それが意味によらない判断と欲望によらない満足とを成り立たせる。この力が美の感じの元になっているのだ。カントのいう美は、主観的に取ると、その意味とか実際上の利益を構わずに一般に必然的に快感を与えるのだし、客観的に取ると、どんな目的も思い浮かべずにただ感じているだけで目的に合うような物の形式だ」——トルストイはこれには論評を加えず、カントの跡継ぎとしてシラーが「芸術の目的は美だ」としたのを批判しているように見える。

わたしは、トルストイの芸術論とカントの「美学」のあいだにはずれがあると思う。カントは、人間の生の現実を観察し考察して、人間の条件を理解しようとした。そして、外界に働きかけそれを認識し行動する生き物ととらえた（そこには人間の置かれた世界を律する論理と人間の認識能力などの問題が含まれる）。それが「純粋理性」の面である。しかし、人間は社会のなかで生きる生物として身に具わっている人間性に条件づけられ、他方で有限な思考をする人間の行動に自由の問題が現われる。カントはその「実践理性」をよく導くための「道徳」を考えたが、あくまで統制的な原理を提示しただけだ。そして、人間は自然や生命に「目的性」を見出すような心性をもっているから、カントはその「判断力」もすくいとって、それを積極的に受けとめて人間の生をよいものに

しようとした。カントの人間把握は立体的で構造的だと思う。銀河の形成や生物の進化のようなことまで考えたから、人間を生成する動的なものとしているのである。

トルストイの思想は同じ方向を向いているけれども、超越的な理念である「神」を保持して、善を頂点に据えて芸術をその下方に置く垂直的な見方を採用したので、カントの哲学と差異が生じるのだと思う。カントは、人間の善を求めるけれども、外界だけではなく人間を現象のように観察する姿勢を崩さない。その見方からすれば、芸術についてもこうでなければならぬと決めつけることはできない。よい芸術も美も探求課題である。

よく練られていないが大体このようにわたしは考える。

さて、孫の本読みの話から思わぬ遠くまで来た。孫は暮れに渡した『ハムレット』をもう読み終わったという。祖父も怠らずに何か読まなければ顔向けできない。

2020年1月31日

海蝶 谷川修